

中世の言葉ともの

— テーベ・トリスタン —

小栗栖 等

Les mots et les choses au Moyen Age

— Thèbes, Tristan —

Hitoshi Ogurisu

2008年11月

Dans cet article nous examinons comment fut exploité, pendant la deuxième moitié du XII^e siècle, le thème de l'ambiguïté d'une expression verbale. Celui-ci était alors une nouveauté et donc risquait de ne pas être compris par les lecteurs-auditeurs. Les auteurs médiévaux commencèrent donc par ajouter des explications aux scènes qui se fondaient sur ce thème-là : celui de l'oracle d'Apollon pour Œdipe et celui du serment d'Iseult. Ils deviendraient bientôt hardis : tandis que les traducteurs islandais et allemand de la version de Thomas, et sans doute Thomas lui-même, avaient eu prudence d'expliquer le serment ambigu d'Iseult, Bérout abandonna une telle explication en confiant la compréhension de ses lecteurs-auditeurs, qui étaient censés s'habituer suffisamment à ce thème.

0.1 問題提起

『テーベ物語 (*Roman de Thèbes*)』は、言うまでもなく、スタティウスの『テーバイス (*Thebais*)』の“俗語訳 (= *mise en roman*)”であるが、両者の物語の開始点は全く異なっている。

物語冒頭、スタティウスは、エテオクレスとポリュネイケスが繰り広げる骨肉の争いと、その悲劇的結末の発端を求めて、六世代も前のアゲノルやその息子カドモスにまでさかのぼる。だが、主人公たちの父親については、その名に触れるのみである。そして、序章を終えるや、テュデウスとヒポメドンの戦いのさなかに読者を投げ込むのである。あまりにも有名な、あのエピソードには触れるまでもないというのが、スタティウスの判断であった。が、時代が下るにつれ、その前提ははなはだ怪しいものとなり、やがて写本には注釈が施されるようになる。それを踏まえ、中世の“翻訳者”は、事情に通じない読者を物語内へと導き入れるため、「一種の前テキスト (*une sorte d'avant-texte*)」(MORA-LEBRUN, p. 12)¹を作り上げた。ラテン語原本に付された注釈や、原本そのものに散在する断片的情報を再構成し、かのオイディプス王の悲劇をもって、物語の幕開けとしたのである。

そこでは、悲劇の発端となるアポロンの神託は、次

のように描かれる。

et Appollo li a mandé,
par un respons qu'il a donné,
que a present engenderra
un felon filz qui l'ocirra.

アポロンは自分の与えた返答によって彼 (ライオス) に教えた。彼自身を殺す運命の冷酷な息子を、今まさに、妻に身ごもらせようとしているのだと。(Thèbes, RAYNAUD-DE-LAGE, vv. 41-44)

L. G. Donovan は、「前テキスト」の源泉を詳細に調べ、上記の神託のもととなったのが、中世において、『テーバイス』の写本にしばしば合本されたラクタンティウス・プラキドゥス (六世紀) の注解だったとしている。

ET TRAIECTUM VULNERE PLANTAS responderat
oraculum Laio, quod a filio suo posset occidi. Unde
natum Oedipum iusit proici transfixis cruribus.

「足を傷で以て貫いた」は、自分自身の息子によって殺されるとする、ライオスに対する神託に呼応したものである。それゆえに、ライオスは生まれたばかりのオイディプスの足を貫き、棄てるように命じたのである。(Lactantii Placidi cité par DONOVAN, p. 42)

この注釈が、古代の作品を直接・間接に踏まえていることは、イオカステの次の台詞を見ても、容易に理解される。

あるときライオス殿に神託がございました。[中略]それはわたくしとあの方とのあいだに生まれる子の手にかかって、あの方がお果てになる運命にあるとのこ

と。[中略] ライオス殿がその両のくるぶしをいっしょに留め金でさし貫き、ほかの者の手に託して道なき山中に棄てたのです。(『オイディプス王』、ソポクレス II-p. 336)。

したがって、ラクタンティウス・プラキドゥスが中世の“翻訳者”と古典的伝統との橋渡しになったのは間違いない。

さて、Donovan は「前テキスト」のほぼ全ての部分の出典を、注釈やスタティウスのテキスト自体の中に見いだした。が、どうしても、それが果たせない場面が一つあった。

Li diex respont : « Quant tu seras
issuz de ci, si trouveras
un houme que tu ocirras ;
ainsi ton pere connoistras. »

神 (アポロン) は答えた。「ここを出ると、一人の男に出会うだろう。お前は、その男を殺す。そうすれば (そのようにして)、お前の父親のことを知ることになるだろう。」(RAYNAUD-DE-LAGE, vv. 203-206)

ライオスが殺害させたはずのオイディプスは生きながらえて成長する。やがて、自分の出自に疑念を抱き、アポロンのもとへ出向いて、自分の父は誰かと問う。上はアポロンの返答である。この場面の源泉について、Donovan は次のように述べている。

オイディプスとアポロンの会見自体については、『テーバイス』は何もはっきりとしたことは言わない。そして、奇妙なことに、我々の参照し得る注釈 (gloses) も、ヴァチカンの神話学者たち (Scriptores rerum mythicarum)²も、その会見を描いていないように思われるのである。(DONOVAN, p. 41; 強調は小栗栖による。以下同様。)

実際、二つ目のアポロンの神託はひどく精彩を欠いており、下記のソポクレスのテキストと比べれば、古典古代の伝統と中世の“翻訳”との間に、ある種の断絶があるのは疑いようもない。

「デルポイに赴いたが、[中略]、悲しい恐ろしい不幸な、ほかのことを告げられた。おれは母上と交わり、見るに耐えぬ子孫を世に示し、生みの父親殺しとなるであろうと言うて。おれはこれを聞いて、その後ははるかに星によってコリントスの地をはかるのみ、おれの禍いなるかの神託の告げた不祥事が成就されることのないような地を目指してのがれた。」(『オイディプス王』、ソポクレス, II-p. 339)

かくして、オイディプスは父親殺害を避けようと旅立ち、テーベの町に向かってしまう... ソポクレスの悲劇においては、父親も息子も、恐ろしい予言の成就を避けようとして、かえって、その成就に加担してしまうのであり、神託そのものが神託の成就の契機となっている。その意味において、神託は物語の推進力となっているのである。が、“翻訳”における神託は、その推進力を全くもたない。精彩を欠くゆえである。

しかし、Donovan が考察対象とした RAYNAUD-DE-LAGE は B 写本と C 写本に基づいた校訂本である。『テーベ物語』には他の写本も存在しており、Constans や Mora-Lebrun は S 写本に基づいて校訂を行っている。そして、Raynaud de Lage 自身も、S 写本が 1370-1406 年という筆写年代にも拘らず、重要かつ古態の異本を提供していることは認めているのである³。

問題の S 写本では (A 写本、P 写本も同様であるが)、自分の父親が誰なのかを尋ねたオイディプスにアポロンは次のように答えている。

ja ton voil nel conoistras
お前は望むことを知ることはできない (Thèbes, MORA-LEBRUN, v. 196)

ここに二つの意味が込められていることは、悲劇の結末を知る者にとっては、明らかである。すなわち、上記の言葉は、「お前は父親が誰なのかを知ることはできない」とも解されるが、他方で、「お前は望まない事実を知る」の意味ともなる。神託は、父を殺し、母を犯したという事実を知ることになるという、オイディプスの未来を予見するものなのである。まさしく神託の面目躍如たるものがある。

ところで、この神託とソポクレスの描く神託との間に、根本的な違いがあることも見逃してはならない。ソポクレスの神託によって引き起こされるのは人違いである。オイディプスは育ての親のコリントス王を、「生みの父親」と思い込んだが、「生みの父親殺しとなる」という言葉の意味を取り違えたわけではない。神託に二つの意味があるわけではないのである。その一方で、S 写本に描かれた神託が、ソポクレスの描いた神託のような、物語を推進する力を持たないことも指摘しておかねばならない。つまるところ、S 写本のテキストに関しても、古典的伝統と“翻訳”の間には、明確な断絶が存在するのである。とはいえ、源泉の不在を、Donovan にならって「奇妙なことに」という言葉で片付けてしまっても良いものだろうか (B-C 写本のテキストに対してならば、それで十分だろうが)。問題の神託に“源泉がない”という事実には、それ以上の意味があるように思えてならない。本論の目的は、それを見つけて出すことにある。

0.2 アポロンの神託

実のところ、上に引用したのは、S 写本の神託 (A, P 写本の) の一部に過ぎない。ここで、その全体を検討しよう。

Li diex li dist : « Pur quel savras ?
Car ja ton voil nel conoistras.

Tiel jor serra, pur veir te di,
que tu dirras : « Pur quel vi ? »
Et d'une chose touz fies sieiez,
que ja ton voel nel conoistreies.
Por tant, si tu vers Thebes vas,
de ton pierre novel orras. »

神（アポロン）は彼（オイディプス）に言った。「どうして、それを知ることができようか。というのも、決して、お前は望むことを知ることはできないからだ。『なぜ、私は見てしまったのか』 そうお前が言う日が、間違いなくやってくるのだ。そして、一つのことをしっかりと知っておくが良い。決して、お前は望むことを知ることはできないということな。だが、テーベに向かえば、お前は、父親の話を知ることができるだろう。(Thèbes, MORA-LEBRUN, vv. 195-202)

同じ意味の、ほぼ同一の言葉を繰り返しているところからも、問題の表現に、“翻訳者”の強い思い入れがあるのは明らかである。だが、一方で、首を傾げなくなる読者も多いに違いない。「『なぜ、私は見てしまったのか』 そうお前が言う日が、間違いなくやってくるのだ」というアポロンの言葉は、神託の両義性を台無しにしてしまっているように見えるからである。

足の傷にまつわる夫オイディプスの打ち明け話に、イオカステは漠然とした不安を抱き、前夫ライオスが赤ん坊の殺害を命じた奴隷を呼び出す。そして、恐るべき事実が明らかとなる。その瞬間こそ、オイディプスはアポロンの言葉の意味を知るべきだ。そういう思いは禁じ得ない。が、それは中世の人々に、我々と同様の読書習慣や読書体験を投影することにほかならない。中世の読書がいかなるものであったかは、中世の作品に尋ねてみるのが一番である。

すると、イヴァンの目に横臥した金持ちの男の姿が目に入った。彼は絹のシートの上に横たわっていたが、その目の前では、一人の乙女が、誰についてのものかはわからないが、俗語(roman)で本を読んでいた。そして、その物語(roman)を聞くために、一人の奥方も側にやってきていた。(Yvain, vv. 5357-5365)

中世においては、読書とは声を出して読み上げることであり、それを聞くことであった。ところが、言葉の多義性に気づくには分析が必要となる。耳で話の流れを追いながらとなれば、その分析に対して時間的な制約が生じるのである。そうであってみれば、せつかくの神託の多義性も、〈読み手—聞き手〉の理解をすり抜けてしまう可能性が高い。それを防ぐには、同一内容・同一表現の繰り返しを行っただけでは不十分で、現代人の目から見れば結論の先取りになりかねないような「解説」さえもが必要だったのである。

とはいえ、以上で全てが説明できるわけではない。読者が理解してくれないのではないかという“翻訳者”の不安には、もっと根本的な理由があった。それは、言葉の多義性を利用するという発想自体が、『テーベ物語』が成立した時代・地域においては、非常に新し

かった、ということである。だが、それを裏付ける証拠は『テーベ物語』の内部にはない。我々はその根拠を別の作品に求めなければならない。

0.3 イズーの宣誓

「お前にしてもらいたいことがあるの」「気高い、お優しい王妃様、ご託を並べずにそちらへ行きましょう。でも、ご用が何だか分かりませんな」「私は服を汚したくないの。ロバの代わりをつとめて、そっと渡し板の上を運んで欲しい」(BÉROUL, vv. 3913-3919, 新倉)

かくして、イズー王妃は、レプラ患者に変装したトリスタンに馬乗りになり、沼地を渡る。そして、向こう岸にたどり着いた王妃は、トリスタンとの不貞がなかったことを証明するために、次のように宣誓する。

Qu'entre mes cuises n'entra home,
Fors le ladre qui fist soi some,
Qui me porta outre les guez,
Et li rois Marc mes esposez.

...

Qui voudra que je plus en face,
Tote en sui preste en ceste place. «

今しがた駄馬のかわりをつとめ、浅瀬の向こうに運んでくれた癩病み、それに我が夫のマルク王以外に、いかなる男も我が股の間に入ったことなし。[.....] 私がこれ以上のことをするのがお望みなら、ほかならぬ、この場所で、覚悟はできておりますぞ」(BÉROUL, vv. 4205-4216; 新倉)

この宣誓には、あまりに多くの学者があまりに多くの紙数を費やしてきた。“言葉の多義性が利用されている”という解説を加えるのには、もはや気恥ずかしさを覚えるほどである。だが、この宣誓が、ソポクレスが描く「生みの父親殺しとなるであろう」というアポロンの古典的な神託とは根本的に異なっていることは、力説しておかねばならない。その神託を、コリントウスのポリュボスを殺すという予言だと、オイディプスが勘違いしたのは、単なる人物の取り違えである。「父親殺しとなる」という言葉自体が別の意味を持っているわけでない。

一方、イズーの宣誓の勘所は言葉の意味の二重性にある。

Tuit cil qui l'ont oi jurer

Ne püent pas plus endurer :

“Dex, fait chascuns, si fiere en jure : ...

王妃がこう誓うのを聞いた者はみなこれ以上は耐えられないのであった—「神よ」と、口々に言う「激しい誓いだ。[後略]

(BÉROUL, vv. 4217-4219, 新倉)

イズーの誓いに対する、人々のこの強い反応は、「いかなる男も我が股の間に入ったことなし」という言葉から来ている。性関係を意味する言葉を、そのまま口にするにも等しい卑猥な表現は、王妃の身分とはほ

とんど相容れない。だからこそ、人々は「耐えられない」のであり、イズーも「これ以上のことをするのがお望みなら」という大見得を切ることができたのである。だが、もう一方で、問題の表現が別の意味を持つことも、居合わせた人々は、十分に理解している。レプラ患者が“股の間に入る”のと、マルク王が“股の間に入る”のは、意味が違うと人々が信じたからこそ、イズーの身の潔白が証明されたのであり、実は両者の意味が同じだからこそ、イズーの身に天罰は下らないのである。

ここで、重要なのは、イズーの宣誓の両義性に、ベルールが何の「解説」も施していないということである。『テーベ物語』との、言葉の両義性に対する、この対応の違いは、どこから来たのだろうか。その答えを知るためには、再び別のテキストに目を向けねばならない。

「わたしがあなたにお誓いしようと思つてお聞き下さい。それはこうでございます。わたしの体を知った者、またいつ如何なる時にもわたしの腕の中や脇に臥たことのある者は、生きとし生ける男の中に、あの巡礼は別としまして、あなたのほかには一人もございません。あの可哀そうな巡礼だけはわたしの腕に抱かれていますのを、あなた御自身御覧になったのですし、わたしは誓うことも誓いを立てて否定することも出来ませんが、神さま並びにありとあらゆる聖者さま達がこの裁きに際し、わたしをお助けになって祝福と救いを得さしめ給わんことを！ これでもまだ不十分でしたら、王さま、あなたがおっしゃる通り、如何ようにも誓いの言葉を訂正致します。」[中略]

彼女は鉄を掴み、火傷することなしにそれを運んだ(ゴットフリート, pp. 350-361)

これはゴットフリート・フォン・シュトラスブルクが中高ドイツ語で描いたイズーの宣誓である。ここでも、誓いが多義性を持っているのは見まがいがよい。そして、「あの巡礼は別としまして、……あなた御自身御覧になったのですし、」という部分が、ベルールの描いた「イズーの宣誓」よりもくどいことも容易に見て取れる。が、実は問題の核心は上の引用の直前の部分にある。すでにお気づきの通り、トリスタンは、ここでは巡礼の姿に身をやつしている。イズーは彼に馬乗りになるのではなく、負ぶさるだけである。だが、突如、巡礼は王妃もろとも転倒する。二人がどういう姿勢をとるに至ったかについては、ゴットフリートはつまびらかにしない。が、周囲の者たちは激怒し、巡礼を殴りつけようとする。それを押しとどめて、巡礼を弁護した後、イズーはこう言うのである。

「けれど、このためにどんなことになるのやら。あなた方もみなご覧のように、わたしは、マルケ王さま以外のどんな男の人もわたしの腕に抱かれたことはなく、また誰一人わたしに寄り添って臥た者もありませんと、裁きの席で誓うことが出来なくなりました。」(ゴットフリート, p. 360)

「と、裁きの席で誓うことが出来なくなりました。」(ゴットフリート, p. 360)

『テーベ物語』と同じ配慮が、ここでなされているのは明らかだろう。ゴットフリートもまた、イズーの言葉の多義性が読者に理解されないのではないかと恐れ、「解説」を施したのである。だが、それは本当に“ゴットフリートの”恐れだったのだろうか。彼は原本の恐れを翻訳したに過ぎないのではないか。我々はそれを疑う十分な理由を持っている。アイスランドのサガ版でも同様の「解説」が施されているからである。

「とはいえ、今や、私は、王様以外の誰もそこに横たわったことがないとは、決して誓うことができなくなりました。」[中略]

そこで、イズーは言った。「王様、私の宣誓を御聞きください。決して、男であれ、女であれ、裸の私に触れたものは、王様、あなたと、小舟から私を運び、皆の眼前で私の体の上に転んだ、あの哀れな巡礼のほかには、おりません。」[中略]

そして、彼女は大胆にも[焼けた]鉄を掴み、それを運んだが、誰も彼女が内心でおびえたり、ひるんだりしているようには思わなかった。(Frère Robert, *La Saga de Tristan et d'Isönd*, trad. Régis Boyer, *TRISTAN-PLÉIADE*, pp. 869-870)

0.4 薄暗い森の中へ

周知の通り、ゴットフリート版やサガ版は、「騎士道本 (version courtoise)」に属しており、トマの『トリスタン』から派生した。残念ながらトマ版の問題の箇所は失われているが⁴、トマ版に問題の「解説」がなかったとはきわめて考えにくい。むしろ、状況証拠は、「解説」が必要だと判断したのが、まさしくトマだったことを示唆している。

さて、*TRISTAN-PLÉIADE* の編者、Christiane Marchello-Nizia によれば、トマは、ベルールにわずかに先んじて、1171-73年頃に『トリスタン』を完成させた (*TRISTAN-PLÉIADE*, p. XIV)。この成立年代の根拠となるのが、トマとアリエノール・ダキテーヌとの関係である。「多くの批評家、それも、かなり数の人々が、英国王ヘンリー二世の妻、アリエノール・ダキテーヌのために、トマが自分のロマンを書いた、とする仮説を表明してきた」(*TRISTAN-PLÉIADE*, p. 1224) のであり、1173年というのは、アリエノールが幽閉の憂き目を見る年である。もちろん、これは成立年代を古く見積もる妨げとはならないので、Rita Lejeune の主張する 1154-1158 年もあり得ると Christiane Marchello-Nizia はしている。

何とも頼りにならない話だが、それでも、トマの場合はまだましである。断片とはいえ複数の写本が残っ

ていて、彼の言語がアングロ＝ノルマン方言だということとはほぼ確実であるし、作品内にロンドンをたたえる記述も見られるとなれば、彼が英国王室に何らかの親近感を持ち得る人物だということも、また確かなことだからである。

他方、ベルールのテキストは、唯一の写本でしか残されていないので、その写本の言語的特徴がベルール自身のものか、写字生のものかが即断できない。それゆえ、彼の言語が大陸のものかどうかさえもが疑問視される始末である (BÉROUL, p. x)。ましてや、彼がどのような背景をもった人物だったかなど、想像しようもない。TRISTAN-PLÉIADE でベルール版を校訂した Daniel Poirion は、その解説の中で、ベルールの人物像に一切触れようともしない (TRISTAN-PLÉIADE, pp. 1129-1150)。1181年という推定成立年代 (TRISTAN-PLÉIADE, p. xiv) を決める手がかりになったのは、作品中で、トリスタンのずる賢さを強調したと見られる、Tristan set mot de Malpertuis (BÉROUL, v. 4286) というくだりである。Malpertuis を住処とする性悪狐ルナルを主人公とする初期枝篇群の書かれたのが、おおよそ、この時代なのである。ほんの一押しで、土台から揺らぎ始めるような仮説の堆積である。

ましてや、Tristan-Pléiade でゴットフリート版を訳した、Danielle Buchinger の「このエストワールは、十二世紀半ばのイングランド、アリエノール・ダキテーヌの宮廷で書かれたと考えられる」 (Tristan-Pléiade, p. 1402) という主張に至っては、不確か極みである。エストワールとは、トマやベルールたちが参照したと目される原本である。彼らが共通した素材をあつかっているのは、確かだとしても、その素材がただ一つの完結した作品から由来したと考える根拠はどこにも存在しないのである。

かくして、トリスタンをめぐる成立年代・成立状況を知ろうとするや、我々は薄暗い森の中に踏み迷ったかのような気分を味わうこととなる。しかし、そうだと

『テーベ物語』、すなわち、「古代物語」の最初の作品は、1150年頃成立した。たぶん、アリエノールの所領のポワティエの学僧 (clerc) よって...」 (MORA-LEBRUN, p. 8)

となると、〈アリエノール—プラタジュネット〉の宮廷を背景にした、〈『テーベ物語』—トマ版『トリスタン』—ベルール版『トリスタン』〉というクロノロジーはある程度の現実味を帯びては来る。

『テーベ物語』、『エネアス物語』、『トロイ物語』という「古代物語三部作 (trilogie antique) (MORA-

LEBRUN, p. 6)」とプラタジュネット朝の深い関係を疑う専門家は存在しない。トリスタンものに関しては、ヘンリー二世を「高貴な王 (nobles reis) (Lais, Prologue, v. 43)」と呼び、『レ』を献じたときされるマリ・ド・フランスは、『すいかずら (Chievrefoil)』でトリスタンのイズーのつかの間の密会を描いた。また、フランス国王ルイ七世とアリエノール間に生まれたマリ・ド・シャンパーニュを「我が奥方様 (ma dame) (LANCELOT, v. 1)」と呼んだクレティアンは、「マルク王と金髪のイズーについて (Dou roi Marc et d'Iseult la Blonde) (CLIGÈS, v. 5)」物語を編んだ。

かように、背景を支える根拠には事欠かない⁵。クロノロジーの方も、また、全くの根無し草というわけではない。

すでにお気づきの通り、イズーは、ベルール版では宣誓するだけだが、「騎士道本」系列では、宣誓の後、焼けた鉄を握っている。神と聖人に対する偽証の罪だけを宣誓の信憑性の担保とするよりも、焼けた鉄を握む方が、強烈な印象を与えるが、実は、これは作品がより古い状態を保っているという証拠となり得る。神明裁判全般が、神を試すものとして、教会からたびたび批判を受けたし、特に「焼きごてや水による盟神探湯は十二世紀には廃止されていた」(ピエール＝イヴ・バデル, p. 33⁶) からである。

また、十四世紀の中英語版 (*Sire Tristrem*) やイタリア語版 (*La Tavola ritonda*) にも、「イズーの誓い」は存在している (TRISTAN-PLÉIADE, p. 951; p. 1065-66) が、どちらの作品にも「解説」は付されていない。中英語版は相当に省略的なので、「解説」も単に省略された可能性がある。が、イタリア語版は、巡礼と道化にイズーを抱きつかせており、むしろ、物語を拡張している。時代が下るに連れて「解説」が不要になった証拠だと考えることができるだろう。

さらに、12世紀の『トリスタン』の姿を、唯一、完全な形で語るアイルハルト・フォン・オベルクの『トリスタン』は、ベルールのそれとともに「流布本 (version vulgaire)」系列を形成する。ところが、「イズーの誓い」の直前で、両者は突如袂を分かち、アイルハルトは、問題の場面はおろか、それを想起させるようないかなる場面も語らないのである。René Pérénnec の言う通り (TRISTAN-PLÉIADE, p. 1634)、アイルハルトの原本には「イズーの誓い」が存在した可能性が高い。では、なぜ、アイルハルトはそれを削ってしまったのか。想定される読者にとって難しすぎる場面に出くわした場合、解説を加える以外にもう一つ選択肢が存在する……。それは、「なかったことにしてしまう」である。

とはいえ、これ以上無謀な跳躍を試みるのは止めておこう。〈トマ版『トリスタン』—ベルール版『トリスタン』〉という年代順を確定するにたる根拠がないことは認めておかねばならない。だが、たとえ、ベルール版とトマ版の成立年代が逆だったとしても、地域や個人により「新しさ」の基準は異なり得る。したがって、我々の次の主張が否定される理由とはなりえない。すなわち、問題の「解説」は、書き手の不安、読者に理解されないのではないかという不安を表していること、そして、その不安が「言葉の両義性」というテーマの新しさに起因すること、である。

0.5 女神の予言

言葉の両義性というテーマを発明=発見したのが『テーベ物語』の“翻訳者”だったかどうかについては、軽々に判断することはできない。しかし、彼が、そのテーマの新しさを十分に意識していたこと、そして、その新機軸をうまく利用し得たという自負をもっていったことは確実である。そのことを最後に確認しておこう。

テュデウスとポリュネイケスは、初対面の際、アドラストス王の居城の軒先で、寝場所を争って大乱闘を繰り広げる。二人の武装は次のように描かれる。

二人は、大きく鋭い槍を持ち、猛獣の皮で作った盾を持っていた。追放の身のポリュネイケスは、大きな獅子の皮でできた盾を持っており、胸の前を覆っていたが、それはオイディプスがくれたものだった。そして、テュデウスは猪の皮でできた盾を持っており、[後略]。(Thèbes, MORA-LEBRUN, vv. 839-846)

アルゴスの王、アドラストスは物音に目覚め、急いで戦いの場に駆けつける。

Pois se comence a porpenser
et lor armes a esgarder,
que sont cil que li pramist
la deuesse qui ce li dist
qu'uns senglers et uns leons fiers
prendront ses filles a moilliers.

そこで、アドラストス王は考え込み、二人の武具を見つめ始めた。というのも、彼らは、彼らは女神が王に約束した者たちだったからである。女神は王にこう言ったのだ。寧猛な野猪と獅子が彼の娘たちを娶るだろうと。(Thèbes, MORA-LEBRUN, vv. 894-899)

アドラストスは若者たちの間に割って入り、両者を仲直りさせる。「ロランとオリヴィエにも劣らない」最強コンビの誕生の瞬間である。二人は、友情だけでなく、アドラストスを義父とする義兄弟の絆でも結ばれることとなる。

さて、同じ場面をスタティウスは次のように描く。

cui Phoebus generos — monstrum exitiabilie dictu!
mox adaperta fides — fato ducente canebat

saetigerumque suem et fulvum adventare leonem.
アドラストス王に対し、ポイボスは予言をなして言う一言も恐ろしい奇怪なことだが、事実はすぐにも明らかになろう、娘婿たる、剛毛に覆われた猪と、褐色の毛並みの獅子が、今こちらに向かいつつあるのだ。(STATIUS, Thebaid, I- vv. 395-397)

もちろん、アドラストスは、この時点では、「猪」と「獅子」を文字通りに理解し、娘たちの身を案じて煩悶する。ポリュネイケスとテュデウスが激闘を繰り広げるのは、その後である。両者を見つめるアドラストスは、

Hic primum lustrare oculis cultusque virorum
telaque magna vacat : tergo videt huius inanem
impexis utrimque iubis horrere leonem,

...
terribiles contra saetis ac dente recurvo
Tydea per latos umeros ambire laborant
exuviaie, Calydonis honos. ...

その時になって、初めて、男 [=ポリュネイケス] の衣服と高価な武具をじっくりと見ることができた。男の背で、獅子かぼさぼさのたてがみを逆立たせているのが見えたのだ。[中略]
剛毛と湾曲した牙でおどろおどろし気な獣の皮、カリュドンの誉れ [=猪] が、テュデウスの広い両肩を辛うじて覆っていた。(STATIUS, I- vv. 482-484; vv. 488-490)

アドラストスは予言の意味を理解し、両者を和解へと導く。

さて、『テーベ物語』と『テーバイス』の本質的な違いは、一つしかない。予言を読者にどの時点で知らせるか、である。スタティウスは、予言の成就の前に、予言の内容を知らせることで、アドラストスと同様、読者にも予言の不可解さを経験させる。他方、“翻訳者”が、予言の内容を読者に知らせるのは、予言が成就した瞬間なのである。これは、もちろん、「予言」が読者に難しすぎたからでも、新しすぎたからでもない。カール・ケーレニーによれば、もともと、「猪」と「獅子」は、気性の荒い二人の若者を暗喩で表したものだっただけで、

後代の語り手たちは、彼 (アドラストス) の負担をもっと軽くしてやろうと、争う二人はその楯の紋章に猪とライオンをそれぞれつけていたとか (アポドロロス、『摘要』)、ポリュネイケスはライオンの毛皮 (ヒュギノス、『神話物語集』)、テュデウスは猪の毛皮を身にまとっていたと語っている。(ケーレニー, p. 368-369)

本当に負担が軽くなったのが、読者であるのは言うまでもない。とはいえ、当初と変わらず暗喩だったとしても、問題の予言には、二通りの意味はない。アドラストスが取り違えたのは「猪」や「獅子」の意味ではなく、指示物である。その原因となるのは、表現の曖昧さに過ぎない。一方、オイディプスに対するアポロンの神託の核心にあるのは、表現の両義性であり、言葉が二通りに解釈され得るということである。そして、両方の意味を最初から知っているのは、言葉を

発したアポロンだけなのである。

もはや明らかだろう。『テーベ物語』の“翻訳者”は、自らの発案による「神託」とスタティウスの「予言」の違いをはっきりと意識していた。だからこそ、スタティウスの「予言」がもたらすサスペンスをばつざりと切り捨てたのである。いや、それだけではない。実のところ、“翻訳者”は、もっと大きなものを切り捨てた。先の『テーバイス』からの引用に現れる予言の主、ポイボスとはアポロンその人の別名だということのを思い起こしていただきたい。“翻訳者”は、予言の主をポイボス=アポロンから、わざわざ、名もない女神に変えてしまったのである。かの予言がアポロンには相応しくないと“翻訳者”が考えたことは明らかである。「お前は望むことを決して知ることはできない」。これこそがアポロンに相応しい神託であった（「予言」と訳した単語 *fato* (< *fatum*) は神託とも訳されることを指摘しておこう）。

我々が眼前にしているのは、“翻訳者”の自らの力量への強烈な自負にほかならない。いや、少なくともこの件に関しては、彼を“翻訳者”ではなく、“作者”と呼ぶべきだろう。“俗語訳 (= *mise en roman*)”からジャンルとしての“ロマン (*roman*)”への変貌の瞬間とまでは言うまい。だが、そうした、変貌の一端を、我々が目撃しているのは間違いない。そこで中心的な役割を占めているのが、言葉の多義性というテーマなのである。普遍に関する論争が展開した時代、旧約聖書を新約聖書と整合させるべく重層的な聖書解釈が試みられた時代、つまりは、言葉の意味作用がそれほど大きな問題となった時代に、その問題から文学的着想を得ようとする者が生じるのは自然なことであった。

とはいえ、最後に、ソポクレスのパラドックス——親子共々、災いを避けようとして、かえって、災いを成就させてしまうというパラドックス——が、きわめて魅力的だということを今一度強調しておかねばならない。それが部分的にしか、中世に伝わらなかったこと自体は、Donovanの言う通り、実に「奇妙なこと」であった。だが、魅力的だということは、呪縛的だということでもある。パラドックスがそのまま伝えられていたなら、『テーベ物語』にも、それがそのまま温存された可能性がきわめて高い。Donovanが「前テキスト」のほぼ全体の原典を同定し得たということは、それだけ“翻訳者”が原典に忠実だったということを示すからである。古代のパラドックスが完全に伝わらなかったからこそ、中世の“作家”は自力で欠落を埋めることとなった。源泉の不在は、中世に独創性発揮の余地を残したという点で、「奇妙なこと」

という以上の意味を持ち得たのである。

— 注 —

¹本論では、末尾の参考文献一覧への参照を、欧文献はスモールキャピタルで、和文献はゴシックで指示する。また、訳文は特に断らない限り小栗栖による。なお、MORALEBRUNの序文には、『ロランの歌』に関する不正確な記述が散見される。少なくとも、彼が参照した Ian Short のテキストでは、チュルパンは十二人衆ではない (p. 21)、ガヌロンとロランの論戦が繰り広げられる会議に出席するのは十二人衆だけではない (p. 23)。

²ラクタンティウス・ブラキドウスとヴァチカンの神話学者たちについては、*Dictionnaire du Moyen Âge* の *Mythographes* の項目を参照されたい。

³「筆写年代の若さにも拘らず、S写本がフランス西部の写本を忠実に反映していると、L. Constans は正当にも考えたし、その上、S写本が『加筆ではない』部分では、古い異文をそのまま温存している、とも彼は述べた」(RAYNAUD-DE-LAGE, p. vii; 強調は小栗栖による)。

なお、本論の以下の部分ではS写本に基づいて、論が展開することに驚く読者も多いに違いない。筆者は少なくとも「神託」の場面は、最も古いとは言えないまでも、十分に古いテキストだと考えており、本論の目的の一つがそれを証明することにあるということ強調しておきたい。なお、「神託」以外の場面では、B-C写本とS-A-P写本は一致を見ている

⁴「失われた」とは言わないでおこう。トリスタンとイゾーが互いの愛を確かめ合う場面、ブランジャンが身代わりを務める、あの「初夜」の場面。Joseph Bédierが永久に失われたと嘆いた、それらの場面が発見されるという奇跡があり得た以上、もう一度奇跡がないと誰に言えようか。

⁵かつて、Régine Pernoudが美しく描き出したような、理想的メセナとしてのアリエール像は、Jean Floriの主張する通り、見直しが必要な面もあるだろう。だが、ポワティエ伯領やプラントジュネットの宮廷が文学の先進地帯の一つを形成していたことは紛れもない事実であった。Cf. FLORI2004-1, FLORI2004-2, PERNOUD-1965, PERNOUD-1988, HASENOHR-ZINK

⁶引用直後の「しかし文学作品にはよく出てくる。トマによる『トリスタン』や『ギョーム・ド・ドール』を思い出していただければよい」(原著 p. 28) は、明らかにピエール＝イヴ・バデルの勘違いである。トマの描いた(はずの)誓約の場面は現存しない。とはいえ、ゴットフリート版とサガ版に見られる“熱鉄の裁き”が、トマ版で存在しなかったということは、ほぼあり得ない。

— 文献一覧 —

1. アイスキュロス/エウリピデス/ソポクレス, 訳者複数, 『ギリシア悲劇 I-IV』, ちくま文庫, 1985-86 年。
2. ケーレニー, カール・ケーレニー, 植田兼義訳, 『ギリシアの神話: 英雄の時代』, 中公文庫, 1985 年。
3. ゴットフリート, ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク, 石川敬三訳, 『トリスタンとイゾルデ』, 養徳社, 1958 年。

4. ピエール=イヴ・バデル, ピエール=イヴ・バデル, 原野昇訳, 『フランス中世の文学生活』, 白水社, 1993.
5. 新倉, 『トリスタン物語』, ベルール著, 新倉俊一訳, 『フランス中世文学集1: 信仰と愛と』(白水社, 1991年) 所収.
6. 松本 1991, 松本仁助他, 『ギリシア文学を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1991.
7. 松本 1992, 松本仁助他, 『ラテン文学を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1992.
1. HASENOHR-ZINK : Geneviève HASENOHR, Michel ZINK, *Dictionnaire des lettres françaises : le Moyen Âge*, Livre de Poche, 1992.
2. GAUVARD : Claude GAUVARD, Alain DELIBERA, Michel ZINK, *Dictionnaire du Moyen Âge*, P.U.F., coll. "Quadrige", 2002.
3. BAUMGARTNER : Emmanuèle Baumgartner, *Tristan et Iseut : de la légende aux récits en vers*, P.U.F., coll. "Études Littéraires", 1987.
4. BÉROUL : Ernest Muret, Béroul Le Roman de Tristan, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A.", 1982.
5. BOUTET-STRUBEL : Dominique BOUTET, Armand STRUBEL, *Littérature, politique et société dans la France du Moyen Âge*, P.U.F., coll. "Littératures modernes", 1979.
6. CLIGÈS : Chrétien de Troyes, éd. par Alexandre MICHA, *Les Romans de Chrétien de Troyes II : Cligès*, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A.", 1982.
7. CONSTANS : Léopold CONSTANS, *Le Roman de Thèbes publié d'après tous les manuscrits*, Firmin-Didot et Cie, coll. "S.A.T.F.", 1890, vol. 1-2.
8. DONOVAN : L. G. DONOVAN, *Recherches sur le Roman de Thèbes*, S.E.D.E.S., 1975.
9. FLORI2004-1 : Jean FLORI, *Philippe Auguste, La naissance de l'État monarchique : 1165-1223*, Tallandier, coll. "La France au fil de ses rois", 2002.
10. FLORI2004-2 : Jean FLORI, *Aliénor d'Aquitaine : la reine insoumise*, Payot & Rivages, 2004.
11. LAIS : Marie de France, Jean RYCHNER, *Les Lais de Marie de France*, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A.", 1983.
12. LANCELOT : Chrétien de Troyes, éd. par Mario ROQUES, *Les Romans de Chrétien de Troyes III : Le Chevalier de la charrette*, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A.", 1983.
13. MORA-LEBRUN : Francine MORA-LEBRUN, *Le roman de Thèbes*, Livre de Poche, coll. "Lettres gothiques", 1995.
14. PERNOUD-1965 : Régine PERNOUD, *Aliénor d'Aquitaine*, Livre de Poche, 1965.
15. PERNOUD-1988 : Régine PERNOUD, *Richard Cœur de Lion*, Fayard, 1988.
16. RAYNAUD-DE-LAGE : Gui RAYNAUD DE LAGE, *Roman de Thèbes*, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A.", 1968.
17. STANESCO-ZINK : Michel STANESCO, Michel ZINK, *Histoire européenne du roman médiéval : esquisse et perspectives*, P.U.F., coll. "Écriture", 1992.
18. STATIUS : J. H. MOZLEY, *Statius, Silvae/Thebaid I-IV*, Harvard University Press, coll. "The Loeb Classical Library", 1928, London.
19. THOMAS : THOMAS d'Angleterre, Bartina H. WIND, *Les Fragments du Roman de Tristan : poème du XII^e siècle* Droz, coll. "T.L.F.", 1960.
20. TRISTAN-PLEAIDE : Tristan et Yseut : Les premières versions européennes, Gallimard, coll. "Bibliothèque de la Pléiade", 1995.
21. YVAIN : Chrétien de Troyes, éd. par Mario ROQUES, *Les Romans de Chrétien de Troyes IV : Le Chevalier au lion: Yvain*, Honoré Champion, coll. "C.F.M.A.", 1963.